

【研究主題】思考力・判断力・表現力を育成する指導と評価に関する研究(外国語活動,外国語科)

1 外国語活動,外国語科における思考力・判断力・表現力の育成と評価の実態

(1) 言語活動の充実の考え方

外国語活動,外国語科の目標であるコミュニケーション能力の育成においては,児童生徒が身に付けた外国語を用いて,自分の気持ちや考えを伝え合うことにより,思考力・判断力・表現力を高めることが重要である。具体的には,図1のように児童生徒にとって価値があり,興味深いと感じられる題材に関して,物事を考え判断させたり,使用する外国語や伝え方を工夫して表現させたりすることで言語活動の充実が図られる。

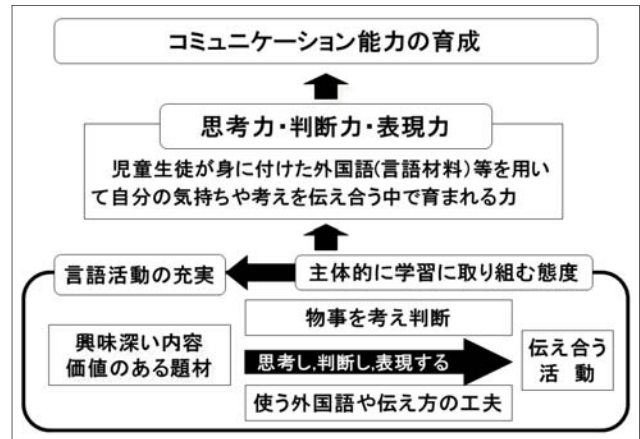


図1 思考力・判断力・表現力を高める言語活動

(2) 実態調査の結果と考察

平成23年度に実施した実態調査の結果から,「思考・判断・表現」の評価に関して次のような現状と課題が明らかとなった。

小学校の外国語活動では,「活動における子どもの様子や発言」や「英語ノートやワークシートの記述」などを資料として用いながら,活動中の児童の発言や工夫した点を評価している(図2)。これらの見取りの現状については,学期や学年の大まかな評価規準から総合的に評価している学校が多いことから,単元ごとに具体的な評価規準を適切に設定することが課題である。

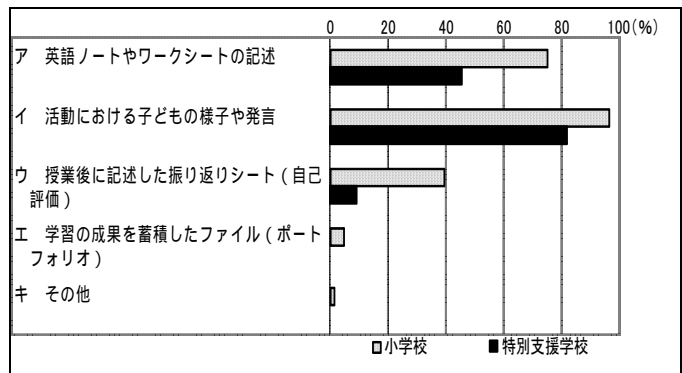


図2 外国語活動における評価の資料

外国語科における「思考・判断・表現」の評価では,「記述式のテスト」,「ノートやワークシート」や「英語で書いた作品」などが資料として使われている(図3)。しかし,明確な基準に基づく評価は容易ではなく,生徒が記述した資料等の見取りに当たっては,評価規準に基づく客観的な基準の設定が課題である。

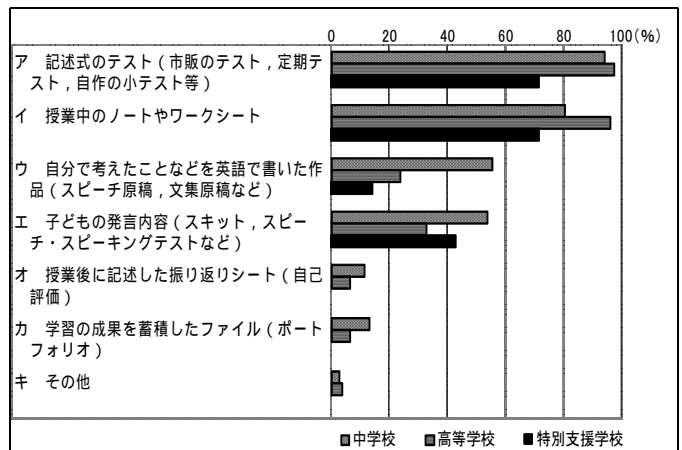


図3 外国語科における評価の資料

2 外国語活動,外国語科における「思考・判断・表現」の評価

(1) 「思考・判断・表現」の観点

外国語活動において,児童が思考・判断し表現する一連の活動は,外国語活動の目標であ

るコミュニケーション能力の素地が総合的に発揮された結果と考えられることから、次に示す評価の3観点の趣旨を踏まえて評価規準を設け、児童の活動の様子を適切に評価する必要がある。

観点	コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	外国語への慣れ親しみ	言語や文化に関する気付き
趣 旨	コミュニケーションに関心をもち、積極的にコミュニケーションを図ろうとする。	活動で用いている外国語を聞いたり話したりしながら、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しんでいる。	外国語を用いた体験的なコミュニケーション活動を通して言語の面白さや豊かさ、多様なものの見方や考え方があることなどに気付いている。

外国語科における生徒の「思考・判断・表現」の評価は、外国語で聞いたり読んだりして理解したことについて、思考・判断したり表現したりする過程を含めて行うことが適切である。このことから、次に示す評価の4観点のうち、基礎的・基本的な知識・技能を踏まえながら、主として「外国語表現の能力」と「外国語理解の能力」の観点から生徒の表現や作品等を評価規準に照らして適切に評価する必要がある。

観点	コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての 知識・理解
趣 旨	コミュニケーションに関心をもち、積極的にコミュニケーションを図ろうとする。	外国語で話したり書いたりして、自分の考えなどを表現している。	外国語を聞いたり読んだりして、話し手や書き手の意向などを理解している。	外国語の学習を通して、言語やその運用についての意識を身に付けているとともに、その背景にある文化などを理解している。

これらの能力は、例えば、教科書の本文の内容について、聞いたり読んだりして得た情報や考えを的確に理解し、その題材に関する自分の考えなどを、相手を意識して既習の言語材料を用いて適切に伝えらるといった、4技能を統合的に活用する言語活動の中で育成される。外国語学習では、発信するために必要とされる語彙や文構造等の知識・理解を基盤としながらも、これらの言語材料が自然な言語の使用場面においてどのように活用されているかを見取ることで、外国語科における「思考・判断・表現」を評価することにつながる。

## (2) 「判断基準」の設定の在り方

外国語活動においては、前述のとおり、目標に照らして評価の3観点から評価規準を定めて評価を行う。英語の習得が主たる評価の対象ではないことから、「できる」「できない」という見取りで数値化して評価するのではなく、図4のように、教師が授業の中で求める児童の具体的な姿を想定し、児童の個々の状況を見取っていくことが大切である。

次頁の図5は、外国語科における「判断基準」の設定等について示

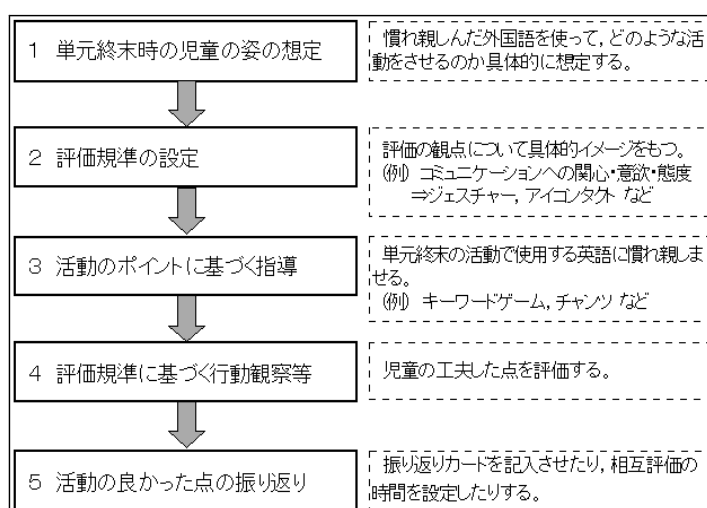


図4 外国語活動における評価の流れ

したものである。生徒が理解したことを基に自分の思いや考えを様々な方法で表現する4技能の統合的な言語活動においては、「外国語表現の能力」や「外国語理解の能力」の評価規準に表されている内容を、分析的に「判断の要素」として端的に示すことで、評価の視点が明確になる。さらに、「判断の要素」に基づき、具体的に生徒の到達の程度を示したものが「判断基準」である。これにより、生徒の活動の様子や表現を適切に見取ることができ、評価後も的確な補充・深化指導を行うことができる。また、「判断基準」の設定の際は、その信頼性を高めるため、既習の言語材料等を考慮しながら予想される生徒の表現等を教師が作成することが大切である。

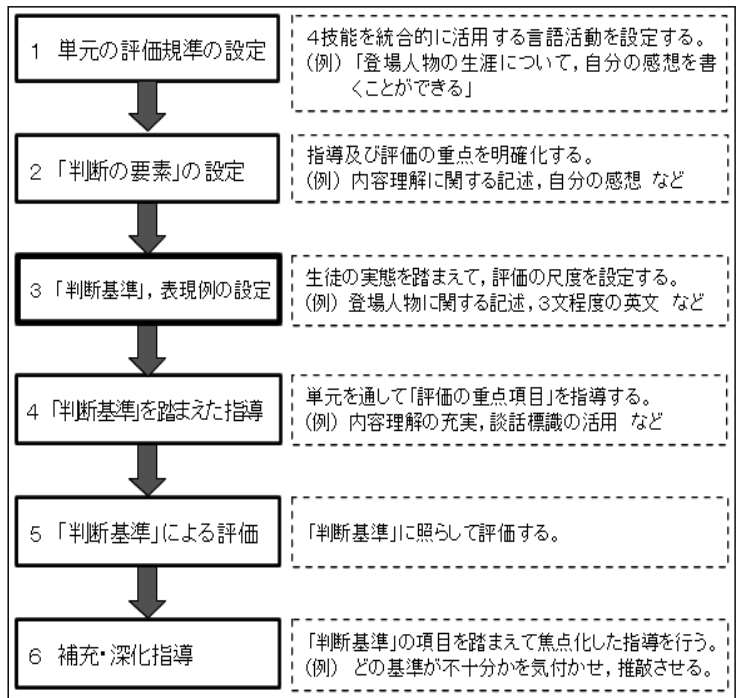


図5 「判断基準」による外国語科の評価の流れ

【「判断基準」の設定例（中学校 第3学年 「Don't Ask Me That Question」）】

評価規準（外国語表現の能力）		
本文の内容について要点を適切に聞き取り、文化による挨拶などの違いについて、既習の表現を用いて自分の考えや感想を書くことができる。		単元の目標に照らして設定する。
評価時期及び評価の対象		
6時間構成の第2時における終末時 教科書題材を基にした生徒の5文程度の英作文		評価規準で設定された生徒の「思考・判断・表現」の学習状況を分析的に表す。
判断の要素		
ア 内容理解に関する記述    イ 自分の考え    ウ 語彙,文構造,文章構成 エ 英文の量		判断の要素を、「おおむね満足できる状況」で示す。
尺度	判断基準	判断基準に照らして具体的な生徒の表現例を想定する。
B	ア 登場人物の言動の引用がある。 イ 登場人物への賛否がある。 ウ 効果的な文構造を使用している。 エ 5文程度の英文である。  【予想される生徒の表現例】 I thought Jenny was often angry at first. But I understand her now. It is rude to ask "Where are you going?" in Jenny's country. So I want to ask Jenny, "How are you?" Because I want her to know Japanese people are not rude.	判断基準Bを基に、指導が必要な生徒に対する補充指導の例を示す。
○状況の生徒への指導	【補充指導】B状況にある作品をモデルとして示し、対話活動等を通して必要な文構造や語彙に慣れ親しませるなど、状況にあった表現の内在化を図る。	判断の要素を、「十分満足できる状況」で示す。
A	登場人物の言動を要約している。 理由付けの根拠や例示がある。 英文が充実し、接続詞等が効果的に使われている。 その他、B状況以上にあると認められるもの。（判断基準Bにない視点での記述など）	判断基準Aを基に、「おおむね満足できる状況」の生徒に対する深化指導の例を示す。
○状況の生徒への指導	【深化指導】現在ある作品の内容や状況を確認し、更に良くするという視点で「登場人物の言動を要約している」「理由付けの根拠や例示がある」等の視点から、指導する。	

### 3 「判断基準」に基づく指導と評価

#### (1) 「判断基準」に基づく指導の考え方

外国語科については、評価の対象となる活動までに、「判断基準」が満たされるように、単元を通して、教材の理解や自己表現に必要な言語材料等について段階的な指導を行うことが重要である。例えば、ホームステイの題材に関連し「対話の状況を考えながら、身近な話題について、話の展開に理由等を付けて話すことができる(中2)」という評価規準を設定した場合、次のような判断基準Bや予想される生徒の表現例が想定される(表1)。

表1 判断基準Bと予想される生徒の表現例

判断基準B	予想される生徒の表現例
ア テーマに関連したことを述べている。	A: Excuse me. Can I talk with you? → A: Oh, really?
イ 自分の気持ちや価値を述べている。	B: Sure. Let's play soccer together!
ウ 既習事項を活用している。	A: Let's talk about sports. B: OK. Let's!
エ 会話の始めと終わりの表現を用いている。	B: I like soccer. It's a lot of fun. A: Thank you very much.
オ 4往復程度の対話ができる。	A: Do you like to play it or watch it? B: Thank you.
	B: I like to play it. _____

このような判断基準Bを単元を通して満たすことができるよう、題材の内容理解を進めるとともに、例えば、1単位時間に5分程度の対話活動を設定し、既習事項を用いて身近な話題についての対話を積み重ねることで、単元終末の表現活動が充実すると考えられる(表2)。

表2 「判断基準」に基づく単元を通じた指導計画

時	統合的な言語活動を目指した指導	評価を生かした指導
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>判断基準Bに基づき、毎時5分程度の対話活動を行わせ、必要な語彙や言語材料を少しずつ活用させる。</li> <li>生徒自身の発想が生かされる対話活動を設定する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>対話したことについてマッピングを行わせ、対話内容について判断基準Bに基づき評価し、指導に生かす。</li> <li>学級全体に共通する課題については、指導を行う。</li> </ul>
2		
3		
4		
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>テーマについて対話する活動を実施する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>対話の再生記録を基に評価を行う。</li> </ul>
6	<ul style="list-style-type: none"> <li>補充・深化指導等を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「判断基準」に基づく指導を行う。</li> </ul>

#### (2) 「思考・判断・表現」の見取りと補充・深化指導

思考・判断したことを書く活動はもちろんのこと、話す活動においても、活動への取組状況を観察するとともに、生徒自身に対話した内容を文字に書き起こさせて評価を行うことで、生徒の状況を把握することができる。表1の対話活動における評価結果を例に挙げ、補充・深化指導の考え方を示したものを次に示す。

C状況の生徒への指導	<p>&lt;判断基準Bによる見取り&gt;</p> <p>質問に対して、助けをもらいながらようやく答えている状況。最後の質問は、質問内容を聞き取ることができず、黙ってしまった。</p>	<p>&lt;補充指導&gt;</p> <p>相手の話していることが聞き取れなかった場合の表現や、質問されて答えた後に、相手に問い返す言い方などを、他の生徒と教師が実際に対話をしてみせた。</p>
B状況の生徒への指導	<p>&lt;判断基準Bによる見取り&gt;</p> <p>テーマに関連したことを述べており、自分の気持ちも述べている。また、既習事項の疑問詞を活用し、理由を尋ねるなど多様な言語材料を使用している。</p>	<p>&lt;深化指導&gt;</p> <p>判断基準Aに基づき、これまでの経験や、思い出などについても展開できるよう過去形の使用を示したり、A状況の生徒の対話記録を示したりするなど、発想の広がりを促した。</p>

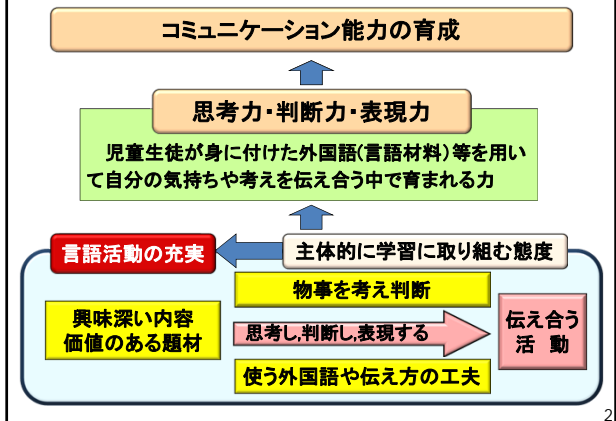
【平成24年度調査研究発表会】  
第5分科会（外国語活動，外国語科）研究発表

思考力・判断力・表現力を育成する  
指導と評価に関する研究

鹿児島県総合教育センター

1

1 外国語活動，外国語科における思考力・判断力・表現力を育成する言語活動の充実



2

1 外国語活動，外国語科における思考力・判断力・表現力を育成する言語活動の充実

「言語活動の充実」の考え方

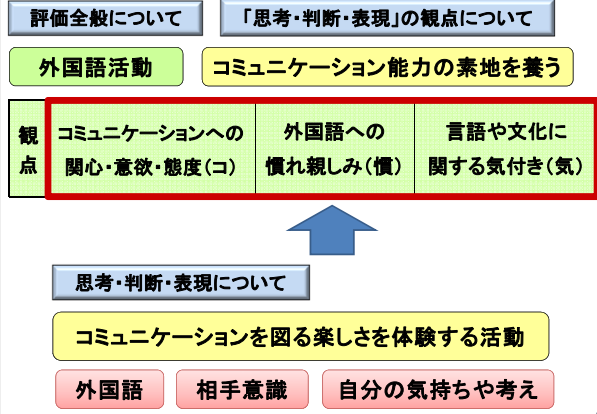
- 外国語活動  
コミュニケーションを図る楽しさを体験する活動
- 外国語科  
4技能を統合的に活用する活動

課題

- 児童生徒が，言語活動において思考・判断し，表現したことをどのように評価するか。
- 評価の改善を指導の改善にどうつなぐか。

3

2 外国語活動における「思考・判断・表現」の評価



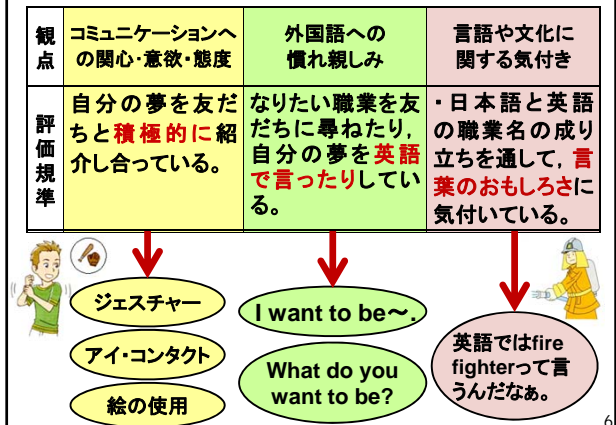
4

2 外国語活動における「思考・判断・表現」の評価



5

2 外国語活動における「思考・判断・表現」の評価

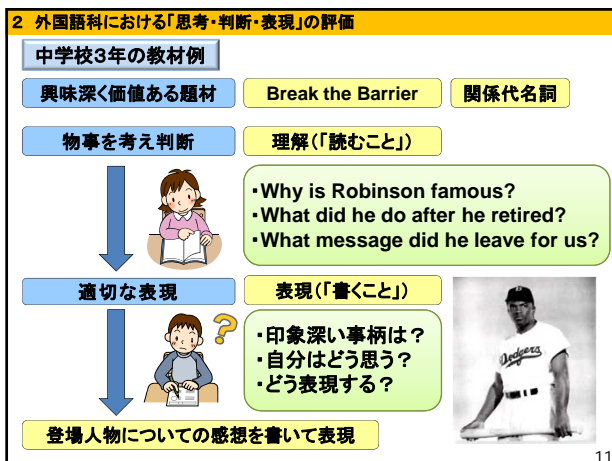
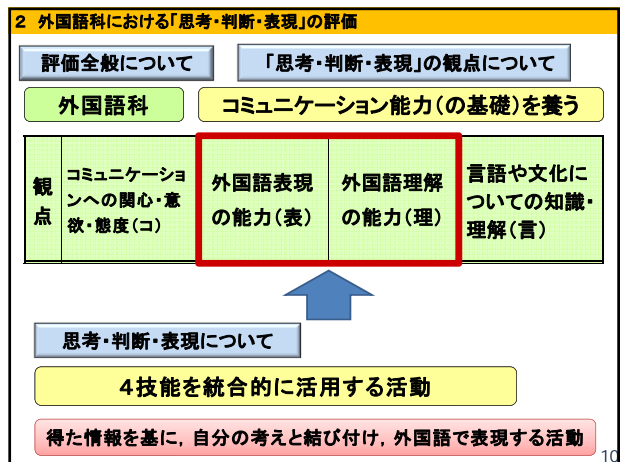
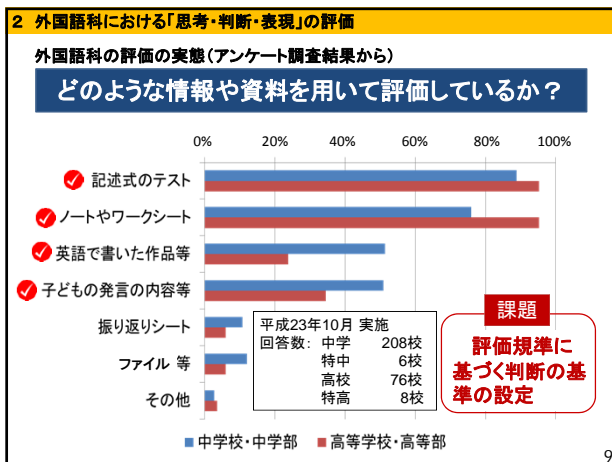
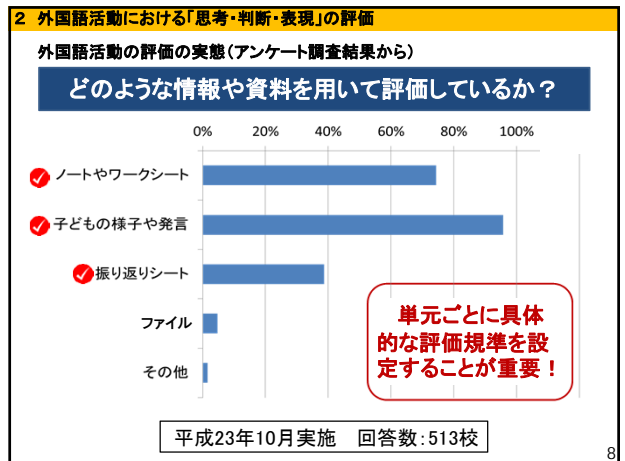


6

2 外国語活動における「思考・判断・表現」の評価

指導と評価の計画

時	目標と活動	コ	價	気
1	○ 様々な職業の言い方を知る。 ・ビンゴゲーム ・キーワードゲーム			○
2	○ 様々な職業を表す語に慣れ親しむ。 ・チャンツ ・ミッシングゲーム		○	
3	○ 就きたい職業について、尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。 ・チャンツ ・インタビュー		○	
4	○ 自分の夢について紹介し合う。	○	○	



2 外国語科における「思考・判断・表現」の評価

指導と評価の計画

時	主な学習活動	コ	表	理	言
1	20世紀の偉人についての聞き取り				○
2	彼の人物像についての理解 ・事実を確認する発問			○	
3	彼の業績についての理解 ・生徒自身のことについての発問			○	
4	彼の生涯についての理解			○	
5	彼の生涯についてのレポート作成・発表		○		
6	ロビンソンの生涯で一番印象に残ったことと、そのことについての感想を書く。	○	○		

2 外国語科における「思考・判断・表現」の評価

評価規準 ジャッキー・ロビンソンの生涯で一番印象に残ったことについて、自分の感想を書くことができる。(「外国語表現の能力」)

分析的に具体化  
判断の要素  
内容理解に関する記述  
自分の感想  
語彙  
文章構成  
英文の量

判断基準 A  
登場人物の業績の要約  
自己の行動に言及  
英文のまとまりと正確さ

その他、B状況以上にあると考えられるもの

判断基準 B  
登場人物に関する記述  
簡潔な感想の記述  
文章構成 (because等)  
3文程度の英文

予想される生徒の表現例  
Jackie Robinson was a great baseball player. Because he broke the barrier in the Major Leagues. I think he did a great job.

深化指導  
B状況の生徒へ  
補充指導  
C状況の生徒へ

13

2 外国語科における「思考・判断・表現」の評価

評価規準 ジャッキー・ロビンソンの生涯で一番印象に残ったことについて、自分の感想を書くことができる。

判断基準 B  
✗登場人物に関する記述 ✗文章構成 (because等)  
○簡潔な感想の記述 ○3文程度の英文

生徒作品例 = C状況(努力を要する状況)  
Jackie Robinson was strong. He played baseball very hard. I play baseball hard, too.

14

2 外国語科における「思考・判断・表現」の評価

評価規準 ジャッキー・ロビンソンの生涯で一番印象に残ったことについて、自分の感想を書くことができる。

判断基準 B  
○登場人物に関する記述 ○文章構成 (because等)  
○簡潔な感想の記述 ○3文程度の英文

生徒作品例 = B状況(おおむね満足できる状況)  
I think that he was a great man. Because he kept fighting for a free and equal world. I think that his life was wonderful.

15

3 判断基準に基づく補充・深化指導

C状況の生徒への補充指導

Jackie Robinson was strong.  
Because he was the first African-American Major Leaguer.  
He played baseball very hard.  
He kept fighting for a free and equal world.  
I want to play baseball very hard like him.

① 判断基準Bで不十分な項目を指摘  
登場人物に関する記述 文章構成 3文程度の英文

② B状況の生徒の作品との比較

③ ノート等を参考に内容理解の復習

16

3 判断基準に基づく補充・深化指導

B状況の生徒への深化指導

I think that he was a great man.  
Because he kept fighting for a free and equal world. he broke the barrier in the Major Leagues, and  
I think that his life was wonderful.  
I want to live like him.  
So I want to do my best to help other people.

① 登場人物の業績の要約  
② 自己の行動に言及  
③ 英文のまとまりと正確さ

17

4 成果と課題

成果

- 「思考・判断・表現」の評価の観点やその手順が明らかになった。(外国語活動, 外国語科)
- 「判断基準」の設定により, 評価及び指導(補充・深化指導を含む)のポイントが明確になった。(外国語科)

課題

- ▲ 児童の発言や行動の観察を効率的に行う必要がある。(外国語活動)
- ▲ 評価規準や「判断基準」の妥当性を高める必要がある。(外国語科)

18

## 事例 1

# コミュニケーションを図る楽しさを味わわせる外国語活動 - 評価規準を明確にした授業の構成 -

指宿市立丹波小学校  
教諭 島 奈穂

はじめに

本校では、平成23年度の新学習指導要領全面実施以前から、学級担任が主となり進めていく外国語活動の授業を想定し、数年をかけて教材の準備や単元計画の作成をしてきた。今年度から共通教材が「英語ノート」から「Hilfriends」に変わったが、これまで作成した教材等が校内の所定の位置に、単元ごとファイルに整理してあるため、誰が担任になっても授業が進められる環境は整っている。しかし、学級担任は、ALTとの授業の在り方やICTの活用法等、外国語活動の授業の進め方に対して不安を感じている者も少なからずおり、研修の必要性を感じている。

子どもは全般的に外国語活動の学習が好きで、興味をもって意欲的に授業に取り組んでいる。しかし、一人一人を見ると課題として次の2点が挙げられる。第1に活動の前提となる受容的な雰囲気作りである。高学年になると恥ずかしさから活動やゲームに参加したがりなかつたり、表現そのものに苦手意識をもっていたりする面も見られる。外国語活動を通して他者との関わりを持てるような態度や能力を育てる必要がある。第2に活動の質の向上である。活動がゲームの面白さ・楽しさを追求するものではなく、相手に伝わる楽しさ・相手の伝えたいことが分かる楽しさを目的とする、コミュニケーションを図る楽しさを目指したものになっているかを精査する必要がある。

そこで、本研究では、子どもが思考力・判断力・表現力を発揮しながら、主体的にコミュニケーションを図るよう評価規準に焦点を当て、指導と評価の改善を図ることとした。評価規準を各時間の授業と結び付けることで、指導の方向性が明確になり、子どもの姿を適切に見取ることができると考える。

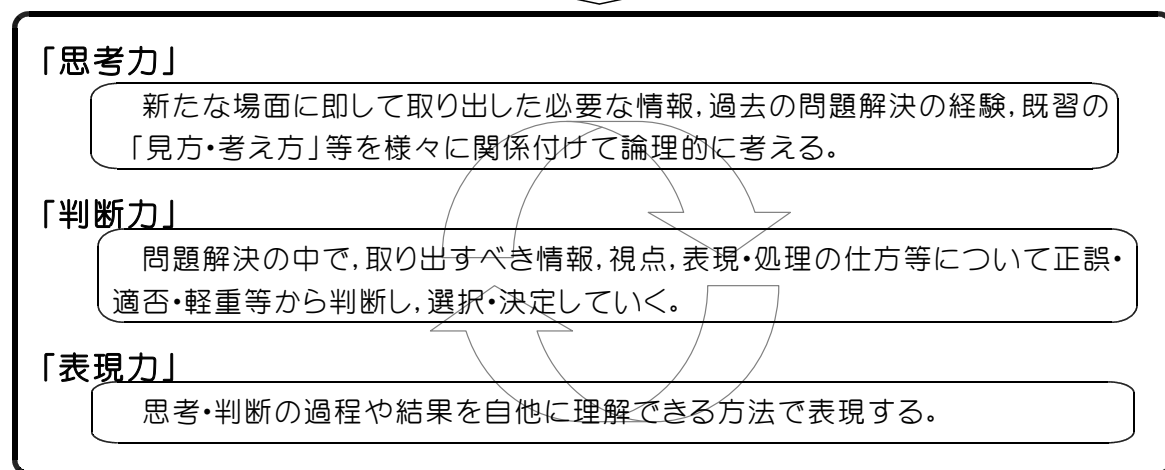
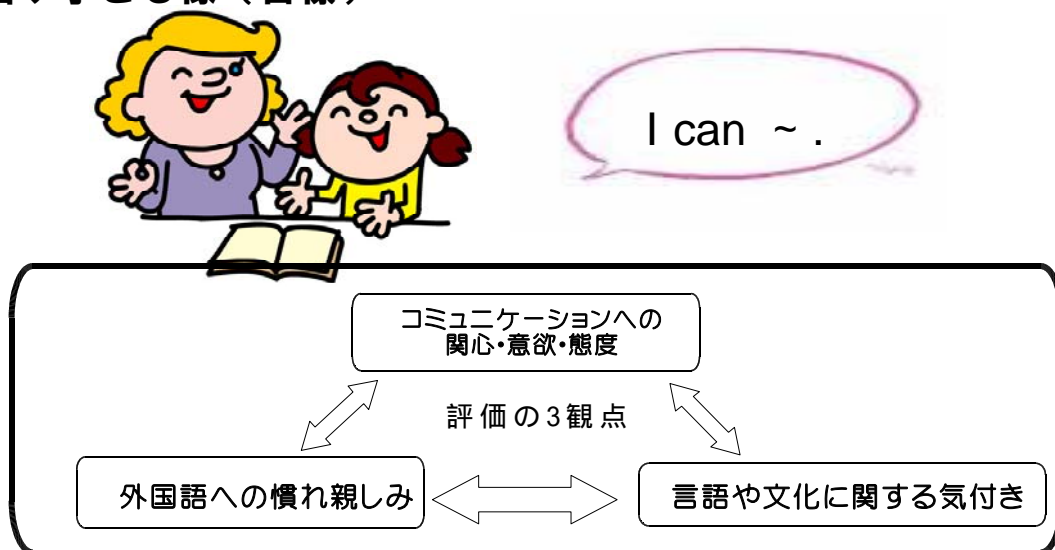
## 1 研究実践の視点

### (1) 外国語活動における「思考力・判断力・表現力」

外国語活動の中では、現在や今までの活動や経験の中から様々な外国語の単語や表現を取り出して関係付け（思考力）、情報を見抜き、それに対応する表現方法を関連付け（判断力）、思考・判断した結果を相手に分かるように表現していく（表現力）。すなわち、「思考力・判断力・表現力」は、それぞれが相互に働き合うものであり、一体化しているものとして捉えた。

しかし、これらを総体として曖昧に捉えていては、授業の中で「どのような子どもの思考や判断を目指していけばいいのか」、「何をどう表現させればいいのか」焦点が定まらない授業が行われ、学んだ結果だけを測ってしまい、結果的にスキル中心になってしまったり、ゲームが目的になってしまう外国語活動の授業になりかねない。3つの力は同時に相互的に働くことを踏まえて、外国語活動の学習評価の3観点からそれぞれが意味する内容や相互の関係性を整理して目指す子ども像を設定することが大切である。目指す子ども像から目標を明確にすることで、コミュニケーションを図る活動を意図的に設定することができると考える。

## 目指す子ども像（目標）



### (2) 評価の3観点から設定する目指す子ども像

外国語活動において「思考力」「判断力」「表現力」を発揮している子どもの姿は、学習評価の3観点に表されている子どもの状況が統合的に発揮された結果であると捉えて、本研究の目指す子ども像を次のように捉えた。

#### ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度

自分の考え・気持ちを相手に分かってもらえるよう工夫する。

相手の気持ちを考えながら聞こうとする。

分からない部分を質問して聞こうとする。

#### イ 外国語への慣れ親しみ

外国語の音声を積極的に聞いている。

活動の中で進んで聞いた外国語を使おうとする。

これまでに慣れ親しんだ外国語を使って伝えている。

#### ウ 言語や文化に関する気付き

日本と外国の文化の違いやそれぞれの良さに気付く。

日本語と外国語の表現の違いや共通点に気付く。

コミュニケーションを図る上で大切なことに気付く。

## 2 授業設計の考え方

### (1) 単元の内容について

外国語活動はコミュニケーションの素地を養うことを目標としていることを念頭に、観点ごとに次の点に留意して単元の内容を検討し、教材研究を行うようにしている。

ア 子どもが興味・関心をもてるような場面設定ができるか。

(コミュニケーションへの関心・意欲・態度)

イ 活動に必要な単語や表現，クラスルーム・イングリッシュは何があるか。

(外国語への慣れ親しみ)

ウ 異文化を理解することやコミュニケーションを円滑に図る要素は何があるか。

(言語や文化に関する気付き)

### (2) 単元構成について

子どもは英語を初めて聞くことが多いため，単語であっても十分に聞かせ，試し，使わなければ，英語を口に出すことはできない。単元始めに聞く時間をしっかりと保障した上で，音声を認識する活動から自分で言葉を選んで表現する活動へと大まかに活動の配列を考えておく必要がある。そこで，「聞く」「話す」(まねる・伝える)「振り返る」の順に活動を位置付け，単元や一単位時間を構成していく。

段階	主な活動	活動例 ※指導上の注意
導入	聞く	カルタ，ビンゴ，キーワード・ゲーム等 ※ ペアや班の形態を活用する。 ※ 日本語との違いなどに気付かせる。
展開	まねる	おはじきゲーム，インタビュー等 ※ ペアや班で，活動に必要な単語や表現に十分に慣れ親しませるようにする。
終末	伝える 振り返る	スピーチ発表，ショー・アンド・テル等 * 学級全体やALTに言いたいことを伝えさせる。 * 子どものがんばりを友達や教師から伝える。

### (3) 一単位時間の構成について

一単位時間を構成する際にも「聞く」「まねる」「伝える」「振り返る」の流れを考えながら，その時間の指導の重点を踏まえ，活動内容に少しずつ変化をつけていく。

### (4) 評価方法

外国語活動においては，指導者が評価規準を授業の中で求める子どもの具体的な姿(目指す子ども像)として設定することで，教師がどう指導すればよいかが明確になる。また，評価規準を基に，子どもにも単元や各授業のめあてを提示することで，単元，各授業等での見通しがもて，授業に意欲的に取り組ませることができる。観点別の評価内容及び方法については，次頁のようなものがある。

観点	評価内容	評価方法
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	子どもがコミュニケーション活動を行う中で、相手意識をもってコミュニケーションを図っている行動を捉えるようにする。	行動観察 発表 振り返りカード Hi, friends! 日記など
外国語への慣れ親しみ	活動で用いている外国語を聞いたり話したりしながら、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しんでいるかどうか、単元の中の様々な活動の中で、外国語を聞いたり話したりしている児童の行動を捉えるようにする。	行動観察 発表 振り返りカードなど
言語や文化に関する気付き	外国語を用いた体験的なコミュニケーション活動を通して、言葉の面白さや豊かさ、多様なものの見方や考え方があることなどに気付いているかどうか、外国語と日本語との比較などを通して発見した言語の違いや共通点から言葉の面白さや豊かさ、多様なものの見方等に気付いている様子を捉えるようにする。	発表 振り返りカード Hi, friends! 日記など

子どもを効率的に見取っていく工夫として一単元ごとに評価規準となる目指す子ども像を記入してある記録簿を準備すると便利である。記録が負担とならないように、一単位時間で見取る子どもを絞り込み、更に1年を通して3観点の評価ができるように、学期ごとに一つの観点到絞って評価していくことも考えられる。

### 3 検証授業

- (1) 単元名 できることを紹介しよう “I can swim.” (Hi, friends! 2 Lesson 3)
- (2) 単元について

この期の子どもは、今までのALTとの交流活動や、外国語活動で英語を使うことに慣れてきている。自己紹介で相手に伝えられる内容も増え、更に「もっといろんなことを英語で伝えたい。」と外国語で表現する意欲も高まってきている。

本単元「できることを紹介しよう」は、外国語で「できる」「できない」という表現を使いながら自分を表現することで自己肯定感を得るとともに、友だちの発表を聞いて、互いのことを知ることでコミュニケーションの大切さに気付くことのできる内容である。さらに、人によって「できること」「できないこと」の違いがあるということに気付かせ、その違いを認め合える人間関係を築く活動へとつなげていきたい。そのことが、これからの外国語活動へ取り組む意欲となり、コミュニケーションへの積極性へとつながる。

単元の構成としては、クイズやビンゴゲーム等を通して“I can ~.” “I can't ~.” “Can you ~?” “Yes, I can/ No, I can't.”の基本表現に慣れ親しませていく。この基本表現に加えて、今までに親しんできた他の単語や表現を使って“Who am I?”クイズを考えさせることで、自分たちで英語を選んで表現していることを実感させ、英語でコミュニケーションを図る楽しさを十分に味わわせたい。

(3) 子どもの実態

【調査結果】 対象：6年2組 38名（平成24年6月8日実施）

外国語活動は楽しいか。	とても楽しい 30名 あまり楽しくない 0名	まあまあ楽しい 8名 楽しくない 0名	
ア 「とても楽しい」の理由	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みんなで楽しく英語が覚えられるから。</li> <li>・友だちといっしょに協力できる（ふれ合える）から。</li> <li>・先生やみんなと楽しく歌ったりゲームが出来たりするから。</li> <li>・自分でだんだんと英語が言えるようになると楽しいから。</li> <li>・将来、役に立ちそうだから。</li> <li>・外国の知らなかったことを知ることが出来るから。</li> <li>・みんなが笑顔になれる学習だから。</li> </ul>		
イ 「まあまあ楽しい」の理由	<ul style="list-style-type: none"> <li>・楽しいけど時々分からないこともある。</li> </ul>		
進んで活動に参加しているか。	進んでやっている 19名 あまりしていない 0名	まあまあ 19名 していない 0名	
授業の中で好きな活動	ゲーム 30名 会話 10名	ALTとの活動 16名 歌・チャンツ 10名	クイズ 16名 発表 5名
英語の理解度	分かる 7名 少し分かる 14名	だいたい分かる 15名 あまり分からない 2名	
外国語活動で分からない時	先生・友だちにたずねる。辞書で調べる。 知っている英語から想像して考える。		
自分のできること	跳び箱、なわとび、料理、リコーダー、サッカー、水泳、野球、バスケ、バドミントン、一輪車、卓球、ピアノ、英語、けん玉、テニス、ソフトボール、そろばん、バレー、将棋、囲碁、パソコン、ドッジボール、フルーツ、絵、ソーイング、お菓子作り、習字		
外国語活動でやりたいこと	ALTとのふれ合い、他の国の言葉や文化、もっと話せるようになりたい、外国の人としゃべりたい、クイズ、ゲーム、発表、世界の人との交流		

【考察】

ほとんどの子どもが、外国語活動に楽しく取り組んでいる（ ）。

ゲームや歌はもちろん、ALTや先生・友だちと話すことに楽しさを感じ、自分の思いや考えを伝え合う活動に意欲をもっている子どもが多い（ ）。

教師が話しているクラスルーム・イングリッシュがあまり分からなくても積極的に自分から尋ねたり、調べたりして進んで活動に参加しようと意欲をもっている（ ）。

自分のできることとして、全員がそれぞれにできることを答えている（ ）。

子どもは英語を通じて友だちと会話をすることに喜びを感じている（ ）。

外国語活動に関して、「自信がないから不安」「分からないことがある」という子どももいる。

（イ）

ゲームは楽しんでいるが、英語で発話する場面では不安を感じる子どももいる。

【考えられる手立て】

- ・ 自信をもって自分のできることを発表し、友だちに認めてもらえることで、また友だちとのできることの違いや友だちの良さに気付けるような活動を展開していく。
- ・ これまで慣れ親しんだ単語や表現を使える場を設定し、自分から進んで英語を使っている子どもを称賛することで意欲をもたせるようにする。
- ・ 日本語以外の言葉でのコミュニケーションを行うことで「伝えようとする気持ち」「何を伝えたいのか理解しようとする気持ち」の大切さに気付かせるようにする。
- ・ 英語で言えないときには、日本語で答えてもよい雰囲気、間違ってもよい学級の雰囲気、友だち同士で教え合える関係づくりを心掛け、安心して英語に慣れ親しめるような環境を作る。

(4) 指導にあたって

ア コミュニケーションへの積極性を図る工夫

今までに知らなかった友だちの一面を知ろうとする思いを持たせ、そのために、お互いに自分の「できること」「できないこと」を伝え合ったり、質問したりしようとする意欲をもたせる。

相手に間違っって伝わらないように、分かりやすく伝えるためのジェスチャーの必要性に気付かせる。

イ 音声への慣れ親しみを図る工夫

「できること」や「できないこと」を表す表現を楽しんで聞いたり言ったりする活動や目的をもって尋ね合う活動を設定し、“I can ~ .”, “I can't ~ .” を使う場面を多く作る。

楽器やスポーツなど “play” を使って表現できることがたくさんあることや、学習した動作を表す言葉以外にも表現できることに気付かせたい。

ウ 異文化への気付きを図る工夫

ALTや担任の「できること」「できないこと」を紹介することを通して、大人であっても「できること」「できないこと」があり、人はそれぞれに違い、それを認め合う活動であることに気付かせる。

導入時のALTの「できること」「できないこと」の紹介を聞きながら基本表現である “I can ~ .”, “I can't ~ .” の音声の違いに気いて付かせる。

(5) 目標

グループ同士で友だちのできることを交流する場面で「できる」「できない」の表現を使って自分のことや友だちのことを説明したり、質問したりしている。

(6) 評価規準 (コ: コミュニケーションへの関心・意欲・態度 慣: 外国語への慣れ親しみ 気: 言語や文化に関する気付き)

観点及び予想される(期待される)子どもの姿	
観 点	予想される(期待される)子どもの姿
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	友だちに自分の「できること」や「できないこと」を積極的に伝えたり、友だちに尋ねたりしようとする。
外国語への慣れ親しみ	<ul style="list-style-type: none"> <li>“I can ~ .”, “I can't ~ .” を使って自分の「できること」「できないこと」を伝えている。</li> <li>“Can you ~?” を使って友だちに尋ねている。</li> </ul>
言語や文化に関する気付き	自分と友だちのできることの違いや友だちの良さに気付いている。
予想される(期待される)子どもの姿が現れない時の手立て	
(コ)	活動にうまく関われない子どものために、最初のうちは活動の相手を指定しておくことで、迷いなく活動できる環境にしておく。また、個別について一緒に活動をする。説明後に子どもの理解を確認し、十分でない場合は部分的に日本語を交えて自信を持って活動に参加できるようにする。
(慣)	子どもが自信をもって活動ができるようになるまで、何度もゲーム的活動において、「できること」「できないこと」を言ったり尋ねたりする場面を作る。また、伝わりにくいときにはジェスチャーを付けながら行くと分かりやすいことを伝える。
(気)	活動後にグループでの振り返りの時間を設け、自分の活動の工夫や友だちの良さを考えさせたり、話し合わせたりする。

(7) 指導計画(全4時間)

時	主な学習活動	コ	慣	気	主な評価規準	評価方法
1	<b>「できること」「できないこと」の紹介を聞いてみよう。</b> 1 Activity1でALTの「できること」「できないこと」を聞き、「できる」「できない」の言い方の違いを見付ける。 2 “Who am I?” クイズをする。 3 先生の「できること」「できないこと」を予想して答える。				「できること」と「できないこと」を言う時の違いに気付いている。 ジェスチャーの必要性に気付いている。	・行動観察 ・振り返りカードの分析
2	<b>「できること」「できないこと」を言ってみよう。</b> 1 Let's listen の言い方を練習する。 2 Let's play2 “Who am I?” クイズをする。				動作を表す言葉や「できる」「できない」という表現を聞いたり、言ったりしている。	・行動観察 ・Hi, friends! ・点検 ・振り返りカードの分析



3 (本時)	友だちの「できること」「できないこと」を聞いてみよう。 1 Activity2 ビンゴゲームをする。 2 自分たちで考えた“Who am I?”クイズをする。			「できること」を尋ねたり、答えたりしている。  ジェスチャーや表情など、分かりやすく伝えるための工夫をしている。	・行動観察 ・Hi, friends! 点検 ・振り返りカードの分析
4	自分ができることを考え、友だちと積極的に交流しよう。 1 Activity3「自分を紹介しよう」を聞く。 2 「できること」を紹介する自己紹介しながらグループ同士で交流する。 3 自己紹介当てゲームをして、友だちのできることをグループでお互いに当てたり付け加えたりする。			自分の「できること」について進んで紹介している。  自己紹介当てゲームに進んで参加している。	・行動観察 ・ワークシート 点検 ・振り返りカードの発表 ・分析

(8) 本 時 ( 3 / 4 )

ア 目標

できるかどうかを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。(慣)

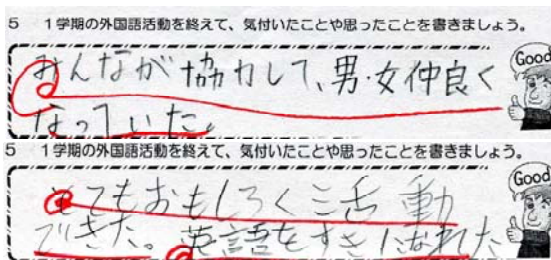
イ 実際

過程	主な活動内容	・教師の働きかけ(発問・留意点等) 評価(評価方法)
導入 7分	1 あいさつをする。 	・ Hello. How are you? How's the weather today? What's the date of today? Can you ~?
活動 1 15分	2 チャンツを行う。 Can you play soccer? No, I can't. Can you play baseball? No, I can't. Can you play piano? No, I can't. Umm...,but I can cook and swim!	・ 動作を表す言葉や答えを変えながらチャレンジする。 ・ ジェスチャーを使いながら行う。 ・ 質問する側と答える側を分けて行う。
活動 2 18分	3 インタビュービンゴゲームをする。 (1) グループ対抗で グループの机に絵カードを並べて、1グループで1つ Can you ~?と教師に質問する。Yes, I can.の答えの時は絵カードを裏返しにしてビンゴを目指す。 	・ 絵カードを出しながら、動作の言い方を復習する。 ・ 初めにグループで行うことで、苦手意識を持つ子どもがみんなと一緒に何度も Can you ~?の聞き方を練習できるようにする。
	(2) 個人で 友だちに Can you ~?と聞きに行き、ビンゴを目指す。	・ 初めの相手をあらかじめ指定をすることで、なかなかインタビューに行けない子どもが行きやすいようにする。

まとめ  
5分



- 4 “Who am I?” ゲームをする。
- 5 本時を振り返る。
  - ・ 一言感想を書く。
  - ・ うれしかったことや、気付いたこと、友だちのよかったところを発表する。
- 6 あいさつをする。



- ・ 自分から行けなかったり、何と言ったらいいのかわからない子どもについていっしょにインタビューをし、自信が付くまで見届ける。  
できるかどうかを友だちに進んで尋ねたり、答えたりしている。(行動観察)
- ・ 答えるときには Yes, I can. と No, I can't. が相手に間違いなく伝わるようにするために、答え方やジェスチャーなどの工夫が必要であることに気付かせる。
- ・ 友だちの意外な一面を見つけてクイズを作れるように声をかける。
- ・ いろいろな人にインタビューすることで、よりおもしろいクイズになることに気付くように声をかける。  
分かりやすく伝える方法を工夫している。(行動観察)
- ・ 本時の活動でよかった所を振り返らせて次時への意欲付にする。
- ・ Thank you evryone.  
See you.

#### 4 成果と課題

##### (1) 成果

評価規準として、目指す子ども像を設定したことにより、活動のゴールがイメージでき、活動の選択と配列が容易にできるようになった。また、何らかの原因で子どもが活動に困難を感じ、思うようにコミュニケーションを図ることができていない場合、各観点の評価規準ごとに支援策を考えておくことで指導を円滑に行うことができた。

##### ア コミュニケーションの関心・意欲・態度

コミュニケーションの積極性を発揮させる前提として、コミュニケーション活動に入る時には、最初の相手を指定して活動に入るように指示した。相手が指定されることで、アイコンタクトや表情、適度なジェスチャーなど積極的に伝えようとすることに集中できた。二人目以降は自分で相手を探して活動を行ったが子どもが言葉で人とかかわる楽しさや、大切さに気付き、人と積極的にかかわる態度につながってきた。

また、相手は表情やジェスチャーからも理解してくれることが分かると、相手に正しく伝えるために積極的に表情やジェスチャーなども使うようになっていた。相手の反応を見ることで、表情やジェスチャーが伝えるための一つの手段なのだと気付くことができた。

##### 【子どもの振り返りカードから】

- ・ みんながゲームで協力して男女仲良くなっていた。
- ・ ゲームや学習を通してみんなと英語で会話するのがとても楽しいと感じた。
- ・ 外国語活動を通して友だちがいっぱいできた。

## イ 外国語への慣れ親しみ

“I can ~.”, “I can't ~.” を聞く活動の時間を授業導入時に十分に取ることで、聞かせる段階での後半では自然と子どもが教師のまねをして口に出すようになっていた。その後、チャンツやキーワードゲーム等を通して、活動に必要な単語や表現に慣れ親しむことができた。

### 【子どもの振り返りカードから】

- ・ 外国語活動を終えたらいつの間にか英語がしゃべれるようになってるのがびっくりした。
- ・ ゲームなどをいっぱいしながら、いつの間にかいろいろ英語が言えるようになっていた。

## ウ 言語や文化に関する気付き

外国語を扱うことによって、子どもは言葉により注目し、言葉の大切さや言葉で人と通じ合う喜びを感じていたようだ。「できること」「できないこと」の交流では、今までに知らなかった友だちの意外な面に気付き、相手のことを知れたことに楽しさを感じる子どももいた。また、ALTの発表を聞きながら、異なる環境・異なる文化による「できること」「できないこと」の違いに気付き「違ってもいいんだ。」「できないことがあってもいいんだ。」という雰囲気が出ていた。

### 【子どもの振り返りカードから】

- ・ 言葉は楽しいことに気付いた。
- ・ 英語は楽しくなる言葉の1つだと思った。
- ・ 今まで知らなかった友だちの「できること」「できないこと」が分かってもっと仲良くなれた気がした。

## (2) 課題

コミュニケーションを図る楽しさを味わわせるよう指導を行ってきたが、具体的な評価方法については課題が残っている。評価規準を設定することにより、目標が明確になり、子どもへの支援もスムーズになってきた一方で、評価規準に照らしてどのように見取ればいいのかがいまいである。各単位時間ごとに子どもを割り当て、計画的に見取っているが、どの程度のことを記録に残していくかが今後の課題である。

## おわりに

小学校外国語活動は技能の高まりのみを目指すのではなく、外国語によるコミュニケーションを通して子どもの人間関係を深めていくものであり、教師と子どもの関係、子ども同士の関係を深めていくものとなる。子どもに外国語活動を通して、言葉の力をつけ、言葉で人とやり取りする楽しさに気付ける活動を工夫していきたい。人は人と言葉でかかわるなかで、自分の存在を確認し、自分の存在に自信をもてる。その言葉でつながる経験が、子どもに自分に自信をもって生きていくことにつながる。さらに、外国語活動ではコミュニケーションが言葉だけでなく、相手の五感を通じて伝わるものであるというコミュニケーションの本質を捉え、受け取り手の相手と自分との間の理解や表現の違い・特徴を汲み取り、相手の理解・表現に合わせ、多角的なアプローチからコミュニケーションを行っていくようにさらに質の高いコミュニケーションを子どもに身に付けさせていく方法を考える必要がある。

## 読んで理解したことについて自分の考えを書く指導と評価 - 単元を通じた段階的な指導を通して -

鹿屋市立吾平中学校  
教諭 下野 哲生

### はじめに

新しい知識・情報・技術が社会のあらゆる領域で一層重要性を増す「知識基盤社会」においては、基礎的・基本的な知識・技能を習得させるとともに、それらを活用するための思考力・判断力・表現力等が必要である。

外国語科の指導における思考力・判断力・表現力の育成は、外国語によるコミュニケーションの中で思考・判断したことを効果的に相手に伝える中でなされると考えられる。端的には、外国語を単に理解することにとどめず、理解した内容を表現に結び付ける言語活動を充実させることである。このことを、外国語の4技能に置き換えて考えると、「聞くこと」や「読むこと」を通じて得た知識等について自らの体験と結び付けながら活用し、「話すこと」や「書くこと」を通じて発信できるよう4技能を統合的に活用する活動を重視することであると捉えた。

本校においても、4技能の統合的な活動として、教科書本文の内容理解に基づく自己表現活動に取り組んでいる。しかし、理解した内容について自分の考えを「書くこと」に関しては課題が多い。そこでこれまで、ワークシートを活用して家庭学習を具体的に示し、書く時間と量を確保しようとしてきた。しかし、依然として生徒の多くは英語を書くことに大きな抵抗感があり、内容にまとまりのある文章を書く活動においては、教師の支援によってようやく活動を成立させている状況がある。

生徒が内容理解に基づき、書いて自己表現できない要因に、教科書本文の内容に対して関連性を見出せなかったり、発想があっても英語で表現できなかつたりすることが挙げられる。そこで、実践において、題材に関連した話題について生徒が意欲的に5文以上の英文で自己表現ができるように、単元を通して段階的に指導することとした。指導と評価のポイントとして、評価規準に基づいた「判断基準」を設定し、最終的に全員がそれらを満たすよう実践を行った。

### 1 研究実践の視点

#### (1) 外国語科(英語)における「思考力・判断力・表現力」を育成する言語活動と評価

##### ア 本校における4技能の統合的な活動

英語における思考力・判断力・表現力は、聞いたり、読んだりしたことについて自分の考えや体験と結び付けて表現する4技能の統合的な活動で育まれる。本校では、4技能の統合的な活動の場を2種類に類別した。

第一に、教科書の題材と生徒に表現させる内容との関連をもたせた活動の場である。例えば、「将来の夢」を題材にした読み取り教材である場合、生徒にとって身近なトピックであり、題材の文構造も生徒の自己表現に直接生かせることから、4技能の統合的な活動が組みやすい。

第二に、教科書本文の内容と生徒の自己表現活動がつながりにくい場合の活動の場である。例えば、「自然災害に立ち向かう人々」が題材である場合は、題材に描かれている内容



どのようなことを，どの程度書いたときに「おおむね満足できる状況」なのかを判断する根拠を示すことが難しいためである。そこで，目標達成の度合いを判断するために，評価規準をより分析的に表した「判断の要素」を基に「判断基準」を設定することとした。また，評価のみならず，生徒に活動の見通しをもたせたるため，具体的な判断の要素や想定される生徒の表現例を設定した。例えば，評価規準を「教科書本文から阪神淡路大震災について読み取り，これまでに学んだ表現を用いて『動物救援活動』についての自分の感想やアイデアを5文以上の英文で書くことができる。」(2年)と設定した場合，「内容に関する記述」「自分の気持ちや価値に関する記述」「今後の行動に関する記述」「既習事項の活用」「英文の量」などが判断の要素となる。この要素を「おおむね満足できる」学習状況で表したものが判断基準Bである。

評価規準・・・動物救援活動について理由を付けて考えや気持ちを話すことができる。	
判断の要素	判断基準B
ア 内容	ア トピックを提示している。
イ 自分の気持ちや価値	イ トピックに関して，自分の気持ちや価値を述べている。
ウ 今後の行動	ウ これからの行動や考えを述べている。
エ 既習事項の活用	エ 接続詞や副詞等の既習の言語材料を使用している。
オ 英文の量	オ 5文以上の英文

判断基準Bに基づき，生徒の予想される表現例を下のように設定できる。

I read about "animal relief activity."  
 I think (that) it's very important.  
 Because people help animals, and animals also help people.  
 There are many earthquakes in Japan and we sometimes lose our homes.  
 Many pets also become homeless.  
 I want to help these poor pets, too.

このように判断基準B及び予想される表現例を基に，評価あるいは指導を的確に行うことができると考える。なお，判断基準Aについては，「自分の気持ちや価値を示し，更に考えを述べている」や「多種にわたる言語材料を使用している」「代名詞や接続詞，副詞等を効果的に用いている」といった，自己表現活動で特に伸ばしたい相手を意識した技能や英語表現の内容の充実を目指して想定しておくことが大切である。

## 2 授業設計の考え方

### (1) 「判断基準」を生かした指導と単元の指導計画の在り方

評価規準に基づく判断基準Bを予め設定しておくことで，単元を貫く指導の視点としてそれらを有効に活用できる。前述のEP及び単元終了時の表現活動においても，判断基準Bの具体的な項目を念頭に置いて指導していくことで指導と評価の一体化を図ることにつながる。内容理解に基づいて自分の考えを書く活動においては，そこで使用する表現形式や語彙に慣れておく必要がある。判断基準B及び予想される表現例を基に，EPにおいて少しずつ必要な表現形式や語彙に慣れ，書くことにつなげる。これにより，使用する語彙や文構造に習熟し，単元終末時の表現活動においてまとまりのある英文の作成が可能になると考えられる。

### (2) 評価計画と適切な評価方法

書く活動の評価は，生徒の記述したワークシートや作品，テスト等を資料として実施することから，表現結果の見取りは容易である。本実践では，終末時に作成したワークシートから判断基準Bを基に評価を試みた。毎時間のEPにおける生徒の表現を，判断基準Bに照らし合わせ

ることで、具体的なアドバイスを与えることにも役立てることができた。

この考え方にに基づき、思考力・判断力・表現力を育成する4技能の統合的な活動の指導と評価に着目して、単元における計画を模式的に表すと次のようになる。

時	統合的な言語活動を目指した指導	評価を生かした指導
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>判断基準Bに基づき、毎時間5～10分程度のEPを行い、必要な語彙や表現に段階的に習熟させる。</li> <li>生徒自身の発想が生かされる対話活動から書く活動につなげる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>判断基準Bに基づき対話したことについて英文を作成させ、評価する。</li> <li>評価を行い学級全体に共通する課題について指導を行う。</li> </ul>
2		
3		
4		
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>テーマについてまとまりのある英文で書かせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発表やワークシートを基に評価する。</li> </ul>
6	<ul style="list-style-type: none"> <li>深化・補充指導を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「判断基準」に基づく見取りを行う。</li> </ul>

### 3 検証授業

(1) 単元名 第2学年 Program 3 “Charity Walk” (SUNSHINE ENGLISH COURSE 2)

(2) 単元について

#### ア 題材観

本単元はチャリティ (Charity) について取り上げている。登場人物の武志がインターネットでハワイ・マウイ島での義援金を集めるチャリティ・ウォークについて知る。また、ウッド先生との話を通して、ウォーク・ザ・ワールドという催しが日本を含めた世界で行われていることを知り、自分たちも何か企画することができないか考えている内容である。

チャリティは、善意の精神から行われる活動や団体のことである。その活動の一つであるチャリティ・ウォークとは、参加者がその大会に参加費を払い、自分たちも歩くという行動によって、他の人々や団体を援助する参加型のチャリティである。生徒にとっては、身近ではなかったり、実体験が少なかったりする題材ではあるが、本単元の学習を通して、社会貢献のため、身近な行動から社会に貢献できることを考えさせ表現させることは有意義である。教科書の内容について自分と関連付けながら考えさせ、書くことを通して表現させる4技能の統合的な活動につなげたい。主な新出の言語材料として、助動詞を扱う。そこで、既習の助動詞を用いた文を想起させながら、義務や命令の表現を用いて自己表現をさせたい。

#### イ 生徒観

本学級の生徒は、英語学習全般について一生懸命に言語活動に取り組む。6月に行った「書くこと」に関するアンケートの結果からは、次のような特徴が見られた。

- 家庭学習で時間をかけて英語を書いている生徒が多いが、教科書の新出語句や本文に関する活動がほとんどで、自分で考えた文を書く生徒は極めて少ない。
- 教科書の本文以外で、自分や友達の紹介文、自分の好きなものについて書いたことがあるが、それ以外については自ら英文を書いた経験がない。
- 英語を書けるようになるために「何回も書く」と、ほとんどの生徒が答えている。一方で、「英文を作成することが難しい」、「自分の英文が適切なのか自信がない」と答えている生徒も多い。

これらのことから、まとまりのある英文を書く活動や書くテーマを授業中で設定し、段階的かつ継続的に書かせていくことが必要である。

#### ウ 指導観

本単元の指導に当たっては、まずチャリティについて生徒の興味・関心を喚起し、世界中

で行われているウォーク・ザ・ワールド等について意見交換をさせながら、チャリティへ参加する意義と方法について考えさせる。それらを生かして、生徒自らがチャリティ活動を行うとしたら何ができるかを表現する活動へと発展させたい。本単元のまとめとして、既習の言語材料である助動詞 can, can't, be going to, will, won't と、新出の言語材料である助動詞 must, mustn't, have to, don't (doesn't) have to を関連付け、「チャリティ」についてまとまりのある英文を書かせる。特に、次の3点に留意し、単元を通じた指導を行いたい。

書く活動を意図的かつ計画的に設定し、英語を書くことに対する抵抗感を減らし、達成感や自信を持たせる。

読む活動と書く活動を関連付けるため教科書本文の内容理解について発問を工夫する。

単語、基本文、まとまりのある英文を意識して書かせながら、基礎・基本の定着を図る。

(3) 単元の目標

- ア ペアやグループ学習を通して、間違いを恐れず、積極的にコミュニケーションを継続しようとする。
- イ 教科書本文の内容を正しく読み取り、それらについての自分の考えをまとまりのある英文で書くことができる。
- ウ 助動詞 must, mustn't, have to, don't (doesn't) have to や I think (that) ~ の文の形・意味・用法を理解することができる。
- エ チャリティ活動について理解を深めることができる。

(4) 単元の評価規準

ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ 外国語表現の能力	ウ 外国語理解の能力	エ 言語や文化についての知識・理解
<p>間違いを恐れず、意欲的に自分の気持ちや考え等を書いている。 教科書の本文や辞書やプリントの例文等を用いて表現しようとしている。</p>	<p>チャリティについての感想や主張を書くことができる。 伝えたい内容を整理し、まとまりのある英文を話したり書いたりすることができる。</p>	<p>教科書の本文を読んで、その内容を正しく読み取ることができる。</p>	<p>新出の助動詞等を用いた文の形・意味・用法を理解している。 チャリティについての知識を身に付けている。</p>

評価規準（外国語表現の能力）	
教科書本文からチャリティについて読み取り，これまでに学んだ表現を用いて，「チャリティ」についての自分の感想やアイデアを5文以上の英文で書くことができる。	
評価時期及び評価の対象（思考，判断に基づく表現内容）	
6時間構成の第5時における終末時 読んだ内容を基にした感想や考えの記述	
判断の要素	
ア 内容に関する記述	イ 自分の気持ちや価値に関する記述
ウ 今後の行動に関する記述	エ 既習事項の活用
	オ 英文の量
尺度	判断基準
B	<p>ア トピックを提示している。</p> <p>イ トピックに関して，自分の気持ちや価値を述べている。</p> <p>ウ これからの行動や考えを述べている。</p> <p>エ 既習事項を活用している。</p> <p>オ 5文以上の英文で述べている。</p> <p>(予想される生徒の表現例)</p> <p>I read about "Charity walk. " It's very important.  We have to help poor children. I will help many people.  I can sell my CDs and books and get some money.  I can give the money to a charity group.</p> <p>・ read, learnedなどの基本的な動詞の過去形を用いたトピックの提示  ・ 既習の助動詞の活用</p>
C状況の生徒への指導	(補充指導) B状況にある生徒の作品のモデルを示し，対話活動等を通して必要な文構造や語彙に慣れ親しませるなど，状況にあった表現の内在化を図る。
A	(判断基準Bに加えて) 自分の気持ちや価値を示し，更に考えを述べている。 既習事項を活用し，多種にわたる言語材料を使用している。 代名詞や接続詞，副詞等を効果的に用いている。 その他，B状況以上にあると認められるもの。
B状況の生徒への指導	(深化指導) 現在ある対話内容を確認し，更に良くするという視点で「チャリティについて具体的に述べている」「代名詞や接続詞，副詞等を効果的に用いている」等の視点から指導する。

(5) 指導と評価の計画（全6時間）

時間	学習活動 EP ... Expression Practice	単元の評価規準	評価方法
1	本単元のチャリティについてのあらましを聞いて把握する。	エの	観察
	助動詞mustを用いた文の構造をモデル対話から類推し理解する。	エの	後日ペーパーテスト
	EP: チャリティについて自分の感想を表現する。	A: What did you read about? B: I read about charity. A: What do you think about it? B: It's interesting.	
2	助動詞mustn'tを用いた文の構造を教師のプレゼンテーションから理解する。	ウの	後日ペーパーテスト
	ハワイのチャリティ・ウォークについて読み取る。		
	EP: チャリティ・ウォークの内容について表現する。	A: Do you want to join the event? B: No, I don't. A: Why not? B: Because I can't go to Hawaii.	

3	助動詞have to, don't have toを用いた文の構造を日常生活と結びつけながら理解する。 ウォーク・ザ・ワールドについて読み取る。	エの ウの	後日ペーパー テスト
	EP:ウォーク・ザ・ワールドの内容について表現する。 A: Did you understand about "Walk the World"? B: Yes, I did. A: Is that a world event? B: Yes. Every year people around the world walk against hunger.		
4	I think (that) ~を用いた文の構造をコミュニケーション場面と結びつけて理解する。	エの	後日ペーパー テスト
	EP:チャリティについての自分のアイデアを表現する。 A: Why do they walk against hunger? B: They want to help poor children. A: Can you do that? B: I don't know, but I can give some money.	イの	
5 本時	前時までの教科書本文の内容について再確認する。		
	チャリティ活動に「バザー」があることを知る。 自分の姿と重ね合わせ、「自分ができることを行動することが大事」ということを理解し、その例を発表する。		後日ペーパー テスト
	チャリティというトピックを設定し、表現をする。 ・チャリティについて自己表現をする。(これまでのEPの活用) ・グループ内で紹介し合い、内容を紹介する。 ・チャリティについてまとまりのある5文以上の英文を書く。	アの イの	観察 観察 ワークシート
6	まとめを行う。 助動詞have to, don't have to, will, must, must notを用いた文の構造に関する理解や使い方の確認をする。 内容に関するQandA等を行う。	エの ウの	ワークシート
後日	ペーパーテスト 助動詞must, mustn't, have to, don't have to等を用いた文の理解や使い方を確認する問題 教科書本文の内容について問う問題	エの ウの	ペーパーテスト

(6) 本時の学習活動 ( 5 / 6 )

ア 目標

チャリティについての自分の感想やアイデアを5文以上の英文で書くことができる。

イ 本時の実際

学習活動	生徒の活動	分	指導上の留意点	評価
1 挨拶	1 英語で挨拶する。	5	英語学習の雰囲気をつくる。 月日、曜日、天気を確認する。 picture cardsを示し質問する。	
2 前時の復習	2 教師の質問に答える。			
3 タスク確認	3 本時のタスクを把握する。 チャリティについて英語で5文以上書いて友達に紹介しよう！	10	本時のタスクを把握させ、意欲的に学習に取り組ませる。	
4 内容理解	4 新出単語を確認し、教科書本文を音読し、内容を読み取る。			
5 モデル提示	5 B状況の生徒の英文を参考に、既習事項を思い出し、表現方法を確認する。			
6 自己表現	6 チャリティについて5文以上の英文で表現する。	30	これまでの英文を参考に、できるだけ表現させるよう促す。 既習の言語材料や、本文に関連する内容を用いているか。 練習の様子を観察する。	
7 グループで	7 グループで表現を確認する。			

の表現確認	数名，発表する。 その後，まとまりのある英文にするためのポイントを確認する。		参考になる点を適宜取り上げる。 まとまりのある英文の構成について再確認する。
8 次時の予告	8 次時の予告を聞く。	5	学習の見通しをもたせ，次時への学習意欲を喚起する。
9 挨拶	9 元気よく挨拶する。		

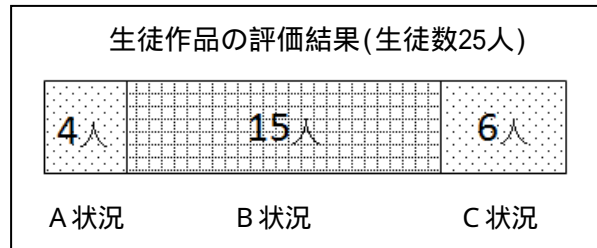
(7) 指導を振り返っての考察

既習事項を用いてテーマについて表現する活動（EP）を終末時に繰り返し継続して行うことは，4技能の統合的な活動へとつながる。EPを設定することは生徒が表現したい内容やその方法を支援し，生徒に表現することへの不安を軽減させたり，自信をつけさせたりすることにつながった。

また，判断基準Bを設定し，それに基づき生徒の予想される表現例を具体的に想定することで，指導過程や評価方法が明確になり，生徒への個別の補充指導や深化指導が容易になった。生徒にとってもまとまりのある英文を書く上でのモデルとなったと考えられる。

(8) 評価結果に基づく補充・深化指導

第5時の対話活動はグループ内で行わせ，活動への取組状況を観察するとともに，生徒自身にこれまでのEPで活用した内容をワークシートにまとまりのある英文を記述させて評価を行った。判断基準Bを全て満たしたB状況の生徒は15人(60%)，判断基準Bのいずれかを満たしていないC状況の生徒は6人(24%)，判断基準Bを超えたと認められるA状況の生徒は4人(16%)であった。

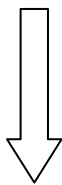


判断基準B	
トピックを提示している。 トピックに関して，自分の気持ちや価値を述べている。 これからの行動や考えを述べている。	既習事項を活用している。 5文以上の英文 ・ read, learned などの基本的な動詞の過去形を用いたトピックの提示 ・ 既習の助動詞の活用

ア 判断基準Bに基づき，「おおむね満足できる」と判断した生徒について

<ul style="list-style-type: none"> <li>⊙ I learned about charity.</li> <li>⊙ It's nice.</li> <li>⊙ we have to help children.</li> <li>⊙ I want to help them.</li> <li>⊙ I can collect waste materials.</li> </ul>
<p>I learned about charity. It's nice. We have to help children. I want to help them. I can collect waste materials.</p>

<p>&lt;見取り&gt; 関係内容を述べており，自分の気持ちも述べている。 既習事項（動詞の過去形や助動詞）を活用している。 5文目では自分のこれからの行動を述べている。 それぞれの英文の関係やこれからの行動の意図について述べるとさらに充実する。</p>
---



<p>&lt;深化指導例&gt; 判断基準A「代名詞や接続詞，副詞等を効果的に用いている」を基に ・ 談話標識 'because'を挿入し，文と文の関連を示すよう助言する。 ・ in the world やtooを加え，英文の内容を充実させる。 判断基準A「自分の気持ちや価値を示し，更に考えを述べている」を基に ・ リサイクル品の販売によりどのようなことが考えられるのかを考えさせる。 A状況の生徒の作品を提示し，これらの視点に気付かせる。</p>
---

<p>&lt;目指す変容&gt; I learned about charity in this lesson. I think it's nice <u>because</u> we have to help poor children in the world. I want to help them, too. I can collect waste materials, sell them and make money. I hope they can get food, clothes and books with the money.</p>
--

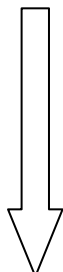
イ 判断基準 B に基づき、「努力を要する」と判断した生徒について

① I leand a daut chatty.  
 ② Its nice.  
 ③ we have to help poor people.  
 ④ I will help them.

I leand about charity. It's nice.  
 We have to help poor people.  
 I will help them.

<見取り>

関係内容を述べており、自分の気持ちも述べている。  
 既習事項を活用しているが、誤りも見られる。  
 これからの行動についての内容に重複が見られる。  
 英文量も不足している。



<補充指導の例>

判断基準 B 「トピックに関して、自分の気持ちや価値を述べている」「これからの行動や考えを述べている」に基づき

- ・ 目標モデル文と比べさせて 5 文目以降の表現内容や方法を補足する。
  - ・ rewrite の前、EP で行った対話活動を再度行わせ、盛り込むべき内容に気付かせる。
- 誤りについての指導
- ・ 教師の机間指導で指摘する。
  - ・ グループで互いの作品を読み合う中で誤りに気付かせる。

<目指す変容>

I learned about charity. It's important. We have many poor children in the world. We have to help them. I can't do "Charity Walk." But I can give some money to a charity group.

ウ 判断基準 A に基づき、「十分満足できる」と判断した生徒について

I learned about charity in this program.  
 It's great. I can't join charity walk.  
 But we have to help poor children.  
 I want to help them.  
 I can sell my books and CDs and get money.  
 I can send the money to a charity group.

判断基準 B を全て満たしている。

既習事項を活用し、助動詞も多様にわたり使用している。

<深化指導の例>

判断基準 A を基に、英文が更に充実するよう新たな視点を示す。

## 4 成果と課題

### (1) 成果

ア 思考力・判断力・表現力を育成する 4 技能の統合的な活動を類型化することができ、教科書の題材や言語材料に応じた言語活動を分類することができた。

イ 表現活動において、必要になる語彙や文構造を、単元を通して継続的に指導することにより、限られてはいるが、生徒が知識として身に付けている英語を、言語の使用場面で自ら考えて使用できた。

ウ 「書くこと」の言語活動について「判断基準」を設定したことにより、目標とする対話の質的・量的な程度が明確になり、これまでの生徒の発想のままの活動が改善された。

エ 「判断基準」を踏まえた評価計画の作成により、各時間の生徒の学習状況の見取りと補充・深化指導を効果的に行うことができた。

### (2) 課題

ア 4 技能を統合的に活用させる指導を踏まえた「書くこと」の評価については内容理解が基盤となるため、表現と理解の重点の置き方について、今後検討をしていく必要がある

イ 本実践では、主にワークシートを活用して評価を行ったが、取組状況の観察による評価の方法や評価テストなど、多様でかつ効率的な評価方法を考える必要がある。

ウ 評価規準及び「判断基準」の妥当性について、今後も検討していく必要がある。

### 事例 3

## 題材に関連して自分の考えを書く活動の指導と評価 - 登場人物の心情の深い読み取りを基にして -

鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校  
教諭 阿多 慶輔

### はじめに

本校は、平成 18 年に県内の公立高校として初めて中学校を併設した全日制普通科高校である。明るく、素直な生徒が多く、ほとんどの生徒が国公立大学への進学を希望し、「文武両道」を合い言葉に勉学と部活動の両立に努力している。

英語学習の指導については、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、「書くこと」の 4 技能をバランスよく育成することを目指している。近年の急速なグローバル化で英語を社内公用語にしたり、英語が得意な外国人採用者を増やしたり、市場を求めて海外へ進出したりする日本企業も増えている。このことから、国籍や文化の違う人々と円滑にコミュニケーションを図るために、英語による情報を的確に理解し、そのことに対して自分の考えを英語で適切に伝えるといった「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、「書くこと」の 4 技能を統合的に活用する英語力を身に付けさせる必要がある。

しかし、本校における 4 技能の指導の実態としては、英語を聞いたり話したりする指導については、科目「オーラルコミュニケーション」では行っているが、進学校であるため、教科書の内容の深い読み取りや文法事項の定着に指導の多くの時間を使っている現状がある。その結果、生徒は語彙・文法事項の知識や長文読解の習慣は身に付いているが、題材に関連して自分の考えを英語で表現する活動につながっていない。本校の英語指導の課題として、生徒が自分の体験や知識に基づいて、題材に関連して自分の考えを表現する機会が少ないと考えている。

そこで、本研究に当たり、教科書の題材について理解するだけでなく、理解したことについて自分の体験や知識等と結び付けて自分の意見や考えを英語で書く活動を設定し、生徒の「思考力・判断力・表現力」の育成を図った。その際、題材についての自分の意見や考えを構築できるように、題材の内容理解活動において、「主人公の行動をどう思うか」や「自分ならどう行動するか」といった発問を行った。また、生徒が表現したものを客観的に評価するため、評価規準に基づいた「判断基準」を設定し、評価後には「判断基準」に基づいた補充・深化指導を行った。

### 1 研究実践の視点

#### (1) 外国語科（英語）における「思考力・判断力・表現力」を育成する言語活動と評価

本校では、生徒の進路実現に向けて大学入試で比重の高い読解力を養成することを重視して、4 技能のうち特に「読むこと」の指導が中心となってきた。そのため、本文に書かれている内容を生徒にじっくりと考えさせて、理解したことについて自分の考えや意見等を適切な英語で表現させる機会が少ないという課題があった。本来、英語は外国人とコミュニケーションをとるための道具であることを考えれば、生徒が教科書の題材を理解した上で、自分の体験や知識等と結び付けながら自分の考えたことを英語で表現したくなるような機会を設定するべきだと考える。そこで、単元終末に主人公が苦渋の決断をした状況を正確に理解した上で、その決断についての自分の考えをわかりやすく 60 語程度の英語で「書くこと」で表現させ、生徒の思考力・判断力・表現力を評価することにした。

## (2) 「判断基準」の設定

外国語科における「思考力・判断力・表現力」を育成するための言語活動とは、聞いたり読んだりして理解したことを基に、自分の知識や体験と結び付けて自分の考え等を表現する4技能を統合させた活動である。この活動では、題材の内容を的確に理解した上で、自分の考えを適切に表現することが求められる。このことから、評価は「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「外国語表現の能力」、「外国語理解の能力」、「言語や文化についての知識・理解」の4観点のうち、特に「外国語表現の能力」と「外国語理解の能力」を中心に生徒の活動を見取ることが適切である。しかし、生徒が表現した作品を評価規準だけで客観的に評価することは容易でない。

そこで、p.22の表に示すように、単元の目標に基づいて設定する評価規準を分析的に表した「判断の要素」として「賛成か反対の立場の明示」、「理由や具体例の記述」、「正確な英語」、「適切な英文の量」を設定した。さらに、判断の要素をより具体化した尺度として「判断基準」を設定した。「おおむね満足できる状況」を表す判断基準Bとして、「賛否の立場の明示」、「根拠や具体例」、「理解困難な間違いが4箇所以内」、「制限語数」を設定した。これらの判断基準Bが全て満たされた場合に「おおむね満足できる状況」と評価した。さらに、判断基準Bを踏まえて「十分満足できる状況」を判断するための判断基準Aを設定した。具体的には「判断の要素」である「根拠や具体例」を複数書いていることや論理的な文章構成等を設定した。

## 2 授業設計の考え方

### (1) 「判断基準」を生かした指導と単元の指導計画の在り方

「判断基準」を設定することで、生徒に4技能を統合的に活用する力を身に付けさせる際に「何を指導すべきか」が明確になる。本研究では、判断基準Bのそれぞれを満たすよう段階的に指導し、単元終末に、厳しい状況で筆者が下した苦渋の判断について自分の考えを60語程度の英語で書かせる課題を設定した。具体的には、パート毎に教科書の内容について生徒の考えを引き出す発問を行い、理由とともにまとめさせた。

### (2) 評価計画と適切な評価方法

本研究では、筆者の下した苦渋の決断について自分の考えを60語程度の英語で書かせることを目標としたが、そのためには、その決断を下した背景について十分理解しておくことが必要であることから、評価時期は題材についての内容理解活動を行った後の単元終末に設定することにした。

評価方法は、生徒の書いた英文を評価規準と「判断基準」に照らして評価することとした。筆者が苦渋の決断をした背景を改めてよく考えた上で、自分の考えやその理由をまとまりのある英文で表現することは、生徒の「思考力・判断力・表現力」が最も表れると考えた。

## 3 検証授業

### (1) 学単元名 Lesson 3 “Crossing the Border” (CROWN English Series )(全6時間)

### (2) 単元について

#### ア 題材観

本課では、非政府組織の一つである「国境なき医師団」に初めて参加した日本人医師、貫戸朋子さんのスリランカでの体験が記されており、世界情勢や国際的なボランティア活動への興味・関心を喚起し、自分が将来どんな形で社会貢献したいかを生徒に考えさせるのに適した題材である。「国境なき医師団」は1971年に医療人道援助団体としてフランスで設立された。人

種、宗教、思想、政治の違いを越えて、紛争、自然災害、伝染病などに苦しむ人々への医療援助活動を、難民キャンプ、飢餓地域、被災地、戦地など医療サービスの欠如した場所で実践している。このような活動の理念を否定する人は誰もいないが、実際には、彼らの医療活動は様々な困難や問題、また矛盾にも直面している。限られた設備と医療品を用いての援助には限界があり、そのような厳しい状況で、貫戸医師がどのような過程を経て「救急患者の酸素マスクを外す」という苦渋の決断を下していったのか読み取らせたい。

#### イ 生徒観

本学級は、2年生の理系クラスであり、学習に対する意欲も高く、基礎学力も定着している生徒が多い。進路への意識も高く、医学部や薬学部への進学希望者もいる。英語学習に関しては、語彙力や文法の理解力もあるので、ある程度の長さの英文を読める生徒は多いが、自分の意見や感想を分かりやすく英文で書く力が全体的に不足している。読解力や文法の力を養成するために、言語形式のみに焦点を当て、基本文例を覚えて書く指導を中心に行ってきたことが要因ではないかと考えられる。「思考力・判断力・表現力」を育成する言語活動を充実するためには、長文を読んで自分の意見を書かせる機会を増やす必要があると感じている。

#### ウ 指導観

「本文の内容に関連して自分の体験や知識等と結び付けながら、自分の考えたことを60語程度のまとまりのある英文で書くことができる」ことを単元の目標とする。本文の内容に基づいて生徒が自分の考えを英語で表現しやすくするために、次のような工夫を行う。

- ・ 各パートの内容理解活動を英問英答で行い、その内容をワークシートに記録させる。これらの英問英答の表現や、ワークシートの学習の軌跡を単元終末の表現活動の資料とする。
- ・ 理解したことに関する生徒の考えや意見を理由とともに日本語でまとめさせる。
- ・ 貫戸医師が苦渋の決断をした際の厳しい状況を正確に理解できるように、第4時に、貫戸医師、危篤の少年とその母親、看護師の4人の役割を決め、ロールプレイさせる。
- ・ 内容理解が終了する第5時に“Dr. Kanto asks us, ‘Was that the right decision?’ What would you say to her?”という課題を与え、生徒に自分の考えを英語で表現させる。

#### (3) 単元の目標

ア 本文の内容を読んで、分かったことや考えたことについて積極的に英語で話したり、書いたりしようとする態度を養う。

イ 本文の内容に関連して、自分の体験や知識等と結び付けながら、自分の思ったことや考えたことを60語程度のまとまりのある英文で書くことができる。

ウ 各パートの内容を正確に読み取り、小見出しを付けることができる。

エ 強調構文の意味や構造を理解している。

#### (4) 単元の目標

ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ 外国語表現の能力	ウ 外国語理解の能力	エ 言語や文化についての知識・理解
英文を読んで、その内容について自分の体験や知識等と結び付けながら、自分の思ったことや考えたことを積極的に表現しようとする。	本文の内容について、自分の立場を明示した上で、それに関する意見や理由を書くことができる。	各場面の筆者の心情に着目しながら、本文の内容を的確に理解することができる。	本文に出ている重要語の意味や用法を理解している。 強調構文の意味や用法を理解している。

評価規準（外国語表現の能力）	
<p>厳しい状況下で貫戸医師が下した決断について、自分の考えを 60 語程度のまとまりのある英文で表現できる。</p>	
<p>評価時期及び評価の対象（思考・判断に基づく表現内容）</p>	
<p>6 時間構成の第 5 時における終末時 読んで理解したことについての感想や考えの記述</p>	
<p>判断の要素</p>	
<p>ア 賛成か反対の立場の明示      イ 理由や具体例の記述      ウ 正確な英語 エ 適切な英文の量</p>	
尺度	判断基準
B	<p>ア 筆者の決断に対して、賛成か反対か自分の意見を明確に書いている。 イ 自分の意見に説得力をもたせるための根拠や具体例を書いている。 ウ 概ね正しい英語で書いている。（綴りや文法等の基本的な間違いは 4 箇所まで） エ 60 語程度で書いている。</p>
	<p>（予想される生徒の表現例） I would like to tell her that her decision to turn off the oxygen was right. This is because she had to use the last tank of oxygen well. She had to treat not only the dying boy but also all the sick people at Madhu. It was natural for her to decide to keep it for another people who might need oxygen. (61 words)</p>
<p>へ C の状況 指導の 生徒</p>	<p>（補充指導） ア 判断基準 B を示した上で、どの基準が満たされていないか個別に示す。 イ B 状況の作品を示し、自分の作品よりどこが優れているかを考えさせる。 ウ ア、イを踏まえてもう一度自分の作品を推敲させる。</p>
A	<p>（判断基準 B に加えて） 自分の意見により説得力をもたせるための根拠や具体例を複数書いている。 接続詞を適切に使用しながら論理的な文章構成になっている。 ほぼ正確な英語で書いている。（間違いは 2 箇所まで） その他、B 状況以上にあると認められるもの。</p>
<p>へ B の状況 指導の 生徒</p>	<p>（深化指導） ア A 状況の作品を示し、自分の作品よりどこが優れているかを考えさせる。 イ 作品をより良くする視点として、「英文の説得力」「論理的な文章構成」「正確な英文」の 3 点を示す。 ウ ア、イを踏まえてもう一度自分の作品を推敲させる。</p>

(5) 指導と評価の計画（全6時間）

時	指導のねらいと学習活動	評価規準	評価方法
1	<p>全体の概要や要点を捉える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Oral Introduction や教科書の写真を使いながら英問英答を行い，課全体の概要を理解させる。</li> </ul>	ウの	ワークシートチェック
2	<p>Part1 の内容や要点を捉える。「<b>国境なき医師団</b>」に入るまでの経緯</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>英問英答を通して内容を理解させる。</li> <li>段落ごとに何が書いてあるかに留意しながら，Part1 の内容を理解させる。</li> <li>筆者の行動に関する自分の考えをワークシートに日本語でまとめる。</li> <li>理解した内容を自分の体験等と結び付けながら考えさせる。</li> </ul>	ウの	活動の観察 ワークシートチェック
3	<p>Part2 の内容や要点を捉える。「<b>難民キャンプでの苦闘</b>」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>英問英答を通して内容を理解させる。</li> <li>難民キャンプで医療行為を行う上での過酷な環境を読み取らせ，その状況を生み出す背景についても考えさせる。</li> <li>筆者の苦労に関する自分の考えをワークシートに日本語でまとめる。</li> <li>理解した内容を自分の体験等と結び付けながら考えさせる。</li> </ul>	ウの	活動の観察 ワークシートチェック
4 本 時	<p>Part3 の内容や要点を捉える。「<b>医師としての究極の判断</b>」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>英問英答を通して内容を理解させる。</li> <li>筆者が医師として究極の判断を下した場面をロールプレイさせ，筆者の揺れる心情やその判断の根拠について考えさせる。</li> <li>筆者の判断について自分の考えをワークシートに日本語でまとめる。</li> <li>筆者の苦渋の判断について他者と意見を交換することで本文についての理解を深めさせる。</li> </ul>	ウの	ワークシートチェック 活動の観察
5	<p>Part4 の内容や要点を捉える。「<b>若者へのメッセージ</b>」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>英問英答を通して内容を理解させる。</li> <li>筆者が医療援助活動を通して得たことは何か想像させる。</li> <li>筆者のアドバイスを自分の進路と結び付けて，考えたことをワークシートに日本語でまとめる。</li> <li>理解した内容を自分の進路と結び付けて考えさせる。</li> </ul> <p>Part3 の状況下で貫戸医師が酸素マスクを外す決断をしたことについて 60 語程度の英語で自分の考えを書く。（1次評価）</p>	ウの アの イの	活動の観察 ワークシートチェック 活動の観察 作品チェック
6	<p>前時に書いた作品の表現や内容が充実するように工夫する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>判断基準 B に基づいて補充指導，判断基準 A に基づいて深化指導を行う。（詳細は p.22 を参照）</li> <li>補充・深化指導を経て，推敲した作品を再提出させる。（2次評価）</li> <li>重要語や強調構文の意味や用法を確認する。</li> </ul>	エの	ペーパーテスト

(6) 本時の実際 ( 4 / 6 時間 )

ア 目標

筆者が医師として究極の判断を下した場面をロールプレイすることで、その場面における筆者や登場人物の心情を読み取ることができる。

イ 本時の実際

学習活動	生徒の活動	分	指導上の留意点 評価
1 挨拶 2 前時の復習テスト	1 挨拶をする。 2 テスト後に相互採点する。	5	英語学習の雰囲気をつくる。 前時に学習した語彙を確認する。
3 本文のリスニング 4 新出語(句)の確認 5 内容理解 6 表現活動	3 本文を聞く。 4 新出語句の意味・用法を確認する。 5 ワークシートの質問に英語で答える。 6 4人グループを作り、貫戸医師、看護師、瀕死の男子とその母親の役割分担をする。 緊迫した状況で4人は何を考え話したかを想像させ、英語でスキットを演じさせる。 代表のグループに実演させる。 筆者の判断について、自分の考えを日本語でまとめる。 についてグループで意見交換する。	42	ワークシートの答えを確認させる。 筆者が究極の判断を下した際の心情や判断の根拠について考えさせる。 スキット作りがうまくいくように助言する。 登場人物の心情の深い読み取りに基づく生徒の活動の様子を観察し、評価する。
7 音読	7 音読シートを使い音読する。		大きな声で、正確に音読させる
8 次時の予告 9 挨拶	8 次時の見通しをもつ。 9 挨拶	3	課題が十分達成できなかった生徒には次時までには仕上げるように指示する。

(7) 指導を振り返っての考察

内容理解活動の際に教科書の本文に書かれている事実を確認する発問だけでなく、生徒の考えを構築する発問をしたり、題材の「山場」である場面をロールプレイさせたりすることで、内容をより深く理解することにつながり、単元終末の4技能を統合的に活用する活動を円滑に行う手立てとして有効であった。

また、判断基準Bに基づき「予想される生徒の表現例」を想定することで、「どのようなことを、

どの程度表現させるか」など指導と評価のポイントが明確になるとともに、評価後の補充指導を効率的に行うことができた。

(8) 評価結果に基づく補充・深化指導

ア 1次評価で判断基準Bの全てを満たしたB状況とそれ以上のA状況の生徒が半数いた。

生徒作品の評価結果（対象：41人）

	A状況	B状況	C状況
1次評価	3人	19人	19人
2次評価	10人	24人	7人

イ 1次評価でC状況と評価された生徒が半数いたが、これらの生徒の作品は次のような点で、判断基準Bを満たすことができていなかった。

冒頭に自分の考えは書けても、その後に Firstly, Secondly などの談話標識を用いて自己の考えの根拠を示していない。

対話における Why~?と聞かれた際の応答と混同してしまい、Because+ S+V.という主節のない文構造で自己の考えの根拠を示している。

I think her decision is right.などの基本的な時制の誤りに気付いていない。

貫戸医師の決断は過去のことなので、「もし~だったら」と仮定法を使う場合は過去完了で表現すべきだが、仮定法過去の表現で書いている。

仮定法過去完了は学習したばかりで、生徒が活用できるほど十分定着していない項目だったためだと考えられる。仮定法過去の使用はプラスに評価した。

ウ 2次評価時点でA状況、B状況と判断される生徒数が増えている。指導内容を理解した上で、自分の意見の根拠を明確にして書き直した生徒が多かった。

【「努力を要する状況」の作品（原文のまま）】

I think that decision is right. Of course, it is natural for the doctor to help people who is ill and injured. But in that situation, the child was suffering. I also think the doctor must not suffer the such people so I think that decision is right. (48語)

- ア 賛成の立場を明示している。
- ×イ 本文の内容に関連した理由が弱い。
- ×ウ 文法上の誤りや趣旨を伝えられない表現上の誤りがある。
- ×エ 語数不足である。

【補充指導】

- ・ 判断基準Bを提示し、満たされていない3項目を指示した。
- ・ ウの項目についてALTによる添削指導を行った。
- ・ B状況の作品を示し、自分の作品と比較させ優れている点に気付かせた。

【補充指導後（原文のまま）】

I think her decision was right. I have two reasons. For one thing, she considered the feeling of the child. His breathing was difficult and the oxgen mask made him uncomfortable. For another, she thought she would save other people. The oxgen is their last tank, and they didn't know when their next tank was coming. Therefore, I think her decision was right. (63語)

- ア 賛成の立場を明示している。
- イ 本文の内容に関連した明確な根拠を示している。
- ウ コミュニケーションを阻害する程度の文法上の誤りはない。
- エ 語数を満たしている。

【「おおむね満足できる状況」の作品（原文のまま）】

I think that the decision was right. Because the boy was uncomfortable and not improving, and it was important to know when the new oxygen tank next. If you use the last oxygen, you couldn't have saved him or her. Doctor must make decisions early and save people as much as possible. The decision was difficult. When you make a decision, you must be sad. (65 語)

ア 賛成の立場を明示

イ 意見の根拠を提示

ウ 概ね正しい英語

エ 60 語以上の英文量



【深化指導】

- ・ A 状況の作品を示し，自分の作品と比較させ優れている点に気付かせた。
- ・ 作品をより良くする視点として，「英文の説得力」「論理的な文章構成」「正確な英文」の3点を示した。
- ・ 「より正確な英文」という視点でALTによる添削指導を行った。



【深化指導後（原文のまま）】

I think that her decision was right in that situation. Firstly if it were not for her decision to turn off the oxygen, the boy would have suffered and the oxygen would not be left for other people who were hopeful to survive. Secondly, she should help more people as a doctor. A doctor must do his or her best, but also think about the situation. So her decision was right. (71 語)

ア 複数の根拠の記述

イ 接続詞の使用による論理的な文章構成

ウ ほぼ正確な英語

エ 60 語以上の英文量

(9) 授業アンケートの結果に基づく分析と考察

(1) 普段のライティングの授業と比べて違った点はありましたか。

ア あった (21 人) イ なかった (20 人)

(2)(1) でアと答えた人は理由を書いてください。

- ・ 内容理解がしっかりできていたので，普段のライティングより書きやすかったから。(4 人)
- ・ 普段のライティングの授業では自分の意見を書く機会はないので，新鮮だったから。(4 人)
- ・ 他の生徒の英文の書き方が分かり，自分の文法の間違いいにも気付くことできたから。(2 人)
- ・ いつもより英作文を書くために参考にする例文や語句を自分で調べたから。(2 人)
- ・ 自分の意見を制限の語数に合わせて書くことが難しかったから。(2 人)
- ・ 英語は受験だけのものではなく，これから自分たちが生きていく上で大切なツールで，それを活用して意志を伝えることはとても大事なことだと思ったから。
- ・ 書く英文の内容に明確な答えがないから。

(3) 今後も本文の内容について自分の考えを英文で書いてみたいと思いますか。

ア 思う (17 人) イ 思わない (1 人) ウ 分からない (23 人)

- ア 約半数の生徒は、本文の内容に関して自分の意見を英語で表現する課題は普段の与えられた日本語を英語で表現する「和文英訳」型の授業と違うと感じていた。
- イ 授業中に行った英問英答で内容理解がしっかりできた生徒は、普段のライティングよりも書きやすかったようである。さらに、自ら書きたい内容を表現するために通常よりも構文や語彙を調べて書こうとする姿勢が身に付いた生徒もいた。コミュニケーションのツールとして英語で表現しようとする等、様々な効果が生徒に波及していったと考えられる。
- ウ 「今後も本文の内容について自分の考えを英文で表現したいか」の質問には、4割以上の生徒が「今後も書いてみたい」と回答している。「分からない」と答えた生徒の数が最も多いが、まだこの種の活動に十分慣れ親しんでいなかったことが要因だと考えられる。授業中の取組の様子から、ほとんどの生徒は自分の考えを英文で書くことに前向きであると思われる。

## 4 成果と課題

### (1) 成果

- ア 評価規準と「判断基準」をあらかじめ設定しておいたので、指導の重点化が図られ、ほとんどの生徒に題材の内容理解とともに自分の考えを書く単元終末の課題にスムーズに取り組ませることができた。また、このような学習が生徒の思考力・判断力・表現力を伸ばすことにつながると実感した。授業後のアンケートで「意外と難しかった」と感じた生徒が9人いたが、「面白かった」と答えた生徒も4人いた。さらに、教科書の題材を単なる英文読解力向上のための素材としてではなく、国語や地歴・公民等の他教科の視点から捉えようとする生徒も4人いた。他にもクラスの友人と感想を共有できて良かったと感じた生徒も多かった。英文の内容把握に関する質問以外にも、日頃から生徒自身の考えを問うことは読解力を養成すると同時に生徒の思考力・判断力・表現力を伸ばすことにつながるものと考えられる。
- イ 「判断基準」を明確に設定することで、これまでのやや主観的な評価から、より客観的で適切な評価をすることができた。また、補充指導や深化指導の際にも指導のポイントをあらかじめ絞ることが可能となり、より具体的な指導を実践できた。
- ウ 今回のような活動は、生徒の思考力・判断力・表現力を伸ばすことにつながるものと考えられる。題材の内容理解を基に自分の意見を英語で表現することに前向きに取り組んだ生徒が多かったことから、授業で本文の内容を十分理解した後に評価の課題を与えたので、主人公の医師が下した判断について英語で自分の意見を述べたいという意欲が強くわき上がったものと考えられる。

### (2) 課題

- ア 事前の準備と評価対象の生徒の作品の評価に時間がかかったので、いかに効率化し短時間で適切に見取る手法を確立するかが課題である。評価対象の課題にスムーズに取り組めるようにパート毎にワークシートを作成したことと、2次評価まで行ったために時間を要した。
- イ 題材の特性に応じた4技能を統合的に活用させる指導の在り方を考える必要がある。本題材は、ある医師の「国境なき医師団」での具体的な体験が書かれており、英文も難解でなかったため、生徒には内容を把握しやすく、自分の知識や体験と結び付けながら考えを英語で表現しやすかった。しかし、抽象度の高いテーマの英文や、難度が高い英文を読む際には、今回のような課題では生徒が表現することが難しいことも考えられる。評価対象の課題の設定については、生徒の学習段階を踏まえ、教科書の題材といかに関連付けていくかが難しい。